

アフリカ援助を下から見れば——●日 野 舜 也

(東京外国語大学教授)

タンザニア東部タンガニカ湖畔のウジジでの話。この地区の村落部選出の国会議員であるM氏は、いま2選目、41歳、わたしが、最初のウジジ調査をしていたころは、まだ中学生、わたしの助手をしていたムウィガ少年の2期ほど後輩で、当時何回かは出会っているはずだが、記憶にはない。でも、いまは押しもおされもせぬ少壮議員、地域の評判もなかなか良い。政府から公用車として借用しているパジェロを駆って精力的に活動している。ある日、かれは、わたしに話があるので会いたいという使者をよこした。かれのオフィスにたずねると、かれは熱っぽく語り出した。「雄弁は金」のアフリカ、まして名にしおう国会議員、その熱弁はとどまるところを知らない。いかに自分がこの地域、とくに、かれの出身であるトングウェ村落社会の振興につくしたか、村落金融の組織をつくりあげたかなどなど。もっともこの金融計画、償還期になって、返済をきちんとやっている人は、ほとんど皆無で、大半は資金を完全につかいはたして、買った網はすでにぼろぼろ、集金を担当する開発銀行勤務のムウィガ氏が、がっかりして手ぶらでもどってきたのは、ついこの間だった。さて、M氏、かれのつぎの計画は、キゴマ地区に図書館を建設したいということ。青少年の教育にいかにかそれが意義深いか、わたしもちろん異存はない。わたしの乏しい書物のなかで、寄付できるものもないわけではないし、などと思いながら聞いていると、いきなり、ところで、ブワナ・ヒノ、これについては、どうしても日本の援助が必要だ、おまえの力でなんとかならないか。予先は、そこにむけられた。M氏おまえもか。その数週間まえ、キゴマ市部選出の国会議員のS氏からは、道路改修について、おなじようにたのまれたばかりであった。それでは、書式をととのえて、大使館へ、などといおうものなら、ヒノ、おまえは、この国の援助計画を知らないのか、すべての援助申請は、中央のおえらいさんの手中にあって、とてもわれわれには回ってこない。だから、わざわざおまえの力を借りたいといっているのではないかということになる。あらゆる事業は外国の援助でやるべきものという前提がここにはある。そういえば、さきの金融計画も北欧のどこかの援助だったはず。わたしは、自分の無力はもちろん棚にあげて、いったいこれでいいのだろうか、なにか間違っていないのかなと思ったのであった。